要素価格均等化定理の背景

―「糧」を求めて、人は動く―

東田　啓作　教授（資源経済学）

　国際経済学では、労働は生産要素として扱われる。国際経済学のテキストの最初のいくつかの章では、財の貿易に焦点があてられるため労働や資本といった生産要素は、産業間では自由に移動できるものの国境を越えての移動はできないことが前提とされる。その学習が一通り終わると、今度は資本や労働などの生産要素の移動を学習する。基礎的な講義においては、労働よりも移動しやすい資本に焦点があてられることが多い。証券投資は短期的に移動することでそれぞれの国・地域の経済に影響を与えるし、直接投資は投資受け入れ国の雇用や技術進歩を通して長期的な生産性に大きな影響を与えるためである。[1]

　しかし、労働、つまり人の移動もダイナミックな国際経済の重要なファクターの一つである。私たちは日常生活で、多くの外国人を見かける。彼女ら・彼らは観光客である場合もあるが、日本に住んで働いて普通に生活している場合もある。日本にいると外国人という感覚を持ってしまうが、国や地域によってはそのような感覚を持つことすらなくなる。例えばバンクーバーなどのカナダの大都市に住んでみると、多くの移民が生活していて、どこの国や地域の出身なのかを問うことはあまり意味がない。

　一般的には労働は賃金の低い国から賃金の高い国へと移動する。個々の労働者にとってそうすることでより高い所得を得ることができるためである。相対的に労働豊富な国においては賃金が低く、労働が希少な国においては賃金が高い。このため、労働移動によって労働が希少な国における労働供給が増加し、労働豊富国における労働供給が減少する。こうして、国際経済学のテキストにある通り、生産要素が国境を越えて自由に移動すると理論的にはその生産要素に対する単位当たりの報酬(労働の場合は賃金)は国家間で等しくなる。しかし、現実には完全に等しくなることはない。「だから経済理論は現実と乖離している」という批判をする人がいるが、この批判は全く的外れなものである。第1に、経済理論は長期的な収束先を示しているのだから、等しくなる方向に貿易を行っている国々の賃金が変化することを示唆していると考えればよい。第2に、もしそうなっていないとしたら、なぜそうならないかということを考えるための出発点を示してくれていると考えればよい。

　さて、前述の通り労働の場合は人の移動が伴うため、資本に比べて自由に移動することが難しい。人は居住地を変えることで、家族や親せき、あるいは友人などの人間関係を少なくとも一定期間諦めなければならない場合が多い。言葉や習慣などの違いも障害となる。それでも、昔から多くの人々がそれまでの生活の場を離れて、長い距離を移動してきた。その大きな目的の一つは、「日々の糧を得る」ということである。以下では、国際経済学の要素価格均等化定理の背景を垣間見てみよう。

　バングラデシュの空港には、人がたくさんい

る。バングラデシュの首都ダッカの空港の出発ロビーとその外には、いつも人だかりができている。到着ロビーにも人だかりができている。この人だかりは、バングラデシュ第2の都市チッタゴンも例外ではない。この人たちのおそらくほとんどは実際に飛行機には乗らない。何をしに来ているのだろうか、と初めて見ると不思議に思う。国際経済学の用語を用いて表現すると、バングラデシュは相対的に労働豊富国である。このため、労働移動が国家間の賃金水準を均等化するまで起こっていない状況では、賃金が他国に比べて低い。そもそも働く機会を得られない人も多い。そのような人々にとっては、就労の機会の多い国に働きに行くことが有望な選択肢の一つになる。そういったチャンスが多い国々は、賃金もバングラデシュに比べて高い。例えば、中東の国々に多くの人が出稼ぎに行く。数か月、ときには数年間、母国に戻ることができない。出稼ぎに行く人を見送るために、出稼ぎから帰ってくる人を出迎えるために、家族や親せきが空港に来ているのだ。人は、日々の糧、わずかでも家族がより豊かな生活を送ることができるように所得の源泉を求めて国境を越えていく。

バングラデシュは人がたくさん①（2010年11月筆者撮影）

バングラデシュは人がたくさん②（2010年11月筆者撮影）

　要素価格均等化は、国家間の話に限らない。一国内の地域間においても、同様の議論は成り立つ。日本でも高度経済成長期には、東北地方をはじめとする地方から中学校を卒業した多くの若者が、東京に就職のために移動していた。都市部は地方よりも賃金が高く、また就業機会も多く存在していたためである。これは都市部での労働供給が増えたことを意味し、日本の高度経済成長を支えた。[2] 話をバングラデシュに戻そう。バングラデシュは、雨が多く、湿地帯も多い。雨期の夕立のときには、首都ダッカの市街地でも膝くらいまで水につかることがある。もちろんこれはこれで、旅行者にとっては貴重な体験である。冷蔵庫が水につからないように底上げ（セメントで台を作ってその上に設置する）している家もある。大規模な洪水が発生すると、川の位置が変わり、農地も移動する。冗談半分に「立派な橋を作っても来年にはその橋の下は川がないよ」と言って笑うくらいである。場合によっては、所得の源泉である農地を失ってしまう場合もある。こうした状況に直面した時、人は高い所得が得られる地域・村へと移動する。他の農村が無理ならば、漁村に移動して小さな船で漁業を始める。とても小さな糧しか得られないかもしれないが、それでも人はより良い機会を求めて移動する。

　賃金差を生み出すのは労働供給量の絶対的な差に依存するのではない。資本、技術の蓄積、一国全体の教育水準なども影響する。例えば、熟練労働がその技能を発揮するためには十分な資本設備、労働者全体の高い教育水準などが必要である。そのような国へは、高等教育を受けた人々、技術を習得した人々が就業の機会とよ

り高い所得を求めて移動する。だから、国際経済学では、相対的な労働豊富国、相対的な資本豊富国といったように、常に「相対的な」という形容詞がつくのである。

賃金差に基づかない労働の移動もある。漁師はさかなを追いかける。魚介類には、定着性のものと広域を回遊する種とがある。ひらめやかれいなどの底魚や貝類はあまり広域を移動しないため、これらを主に漁獲する漁師たちもそれほど広範囲を移動することはない。一方、カツオやマグロなどは広域を回遊するため高度回遊魚種と言われる。こういった回遊魚を獲って生計をたてる漁師は、カツオの群れを追いか

バングラデシュ、チッタゴンの漁師さんたち（2013年 6 月筆者撮影）

けて移動していく。現在では一か所に定住している漁師であっても、先祖をたどると遠くからカツオを追いかけて住む場所を転々としていた家系であったりする。カツオやマグロを追いかけてという訳ではないのだが、フィリピンのルソン島中部の漁村を訪ねると、外国からやってきた漁師さんに出会えたりする。筆者が研究調査のために南シナ海に面した漁村を訪れ、そこの漁師さんたちに被験者として研究調査に参加していただいたときも、ある漁師さんが「彼は台湾から、彼はベトナムからやってきた」と説明してくれた。その「やってきた」というのが、たまたまその日に漁をしながらフィリピンの村

オールドダッカで売られているさかな（2010年11月筆者撮影）

に立ち寄ったという意味なのか、その漁村に住み着いてしまったという意味なのかは分からないままだったが、普通に楽しそうに会話をしていた。もしかすると漁師さんたちの意識の中には、国境はないのかもしれない。[3]

人々はまたより良い教育の機会を求めて移動する。世界中で毎年多くの人々が留学のために国境を越える。新しい知識を得るため、語学力を高めるため、留学先の国・地域で働くために必要な資格を得るため、など人によって様々である。彼女ら・彼らは、その先の自分の人生を見据えている。自分たちの目標のために、あるいは目標を見つけるために、移動する。生きる

フィリピンの小規模漁業者の水揚げの様子①（2013年11月筆者撮影）

フィリピンの小規模漁業者の水揚げの様子②（2013年11月筆者撮影）

糧を求めて、人は動く。

　時に人は絆を捨てて、国境を越えて移動する。そういった人の移動が、新しい貿易航路を作り、新しい流通経路を作り、そして新しい文化や制度を作り上げてきた。貿易はお互いの国を豊かにするし、流通経路の構築はより効率的な生産と消費を可能にする。新しい文化の生成は、人々の生活を楽しくする。グローバル化が深化してきた時代、さらなる貿易の自由化とは、国家間の制度の調和を意味するようになってきた。様々な障害を乗り越えての人の移動は、お互いの理解を深めることによって制度の調和を補完していく。

〈参考文献〉
石川城太、椋寛、菊地徹（２０１３）。『国際経済学をつかむ　第2版』有斐閣。
中西訓嗣（２０１３）。『国際経済学　国際貿易編』ミネルヴァ書房。
藤林泰、宮内泰介（２００４）。『カツオとかつお節の同時代史　―ヒトは南へ、モノは北へ―』コモンズ。
若林隆平（２００９）。『国際経済学　第3版』岩波書店。

1　国際経済学の入門書としては、石川・椋・菊地（２０１３）が挙げられる。また、若杉（２００９）、中西（２０１３）などはスタンダードなテキストである。

2　現在でも都道府県間の賃金格差は存在する。たとえば、厚生労働省の賃金構造基本統計調査などを参照されたい（http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/chingin_47sokuhou.html）。

3　カツオの歴史についての　藤林・宮内（２００４）の研究は興味深く、また楽しく読める。